



『第二回内国勲業博覧会出品写真』(宮内庁書陵部所蔵)より
作品の右下に置かれた札に「京都西村組製造」と記される。この前年に屋号を創業以来の千切屋から千成組へ、さらにこの年の初めに西村組と改称している。

4 西村總左衛門

《塩瀬友禪海棠に孔雀図》

一幅

明治十四年(一八八二)
塩瀬地・友禪染・刺繍
総二四六・〇×一七二・七
京都府 第三区第三類
進歩賞牌一等

江戸時代後期に京都画壇で活躍した岸駒(一七四九―一八三八)が描いた《孔雀図》(重要美術品、千總所蔵)を原画として、原画とほぼ同寸に、友禪染によつて原画の絵画表現を忠実に再現した掛幅装の作品である。塩瀬地に伝統的な色挿し技法と新しい技術である写友禪の技法で、細部まで緻密に描き、孔雀の羽や海棠の花、蜜蜂など一部に刺繍を施している。画面周囲に配された更紗風の蜀江文の表装裂は、画面と一続きの友禪染による。

本作は、明治十四年の『第二回内国勲業博覧会出品写真』に掲載された図版と作品の図様や体裁が一致しており、『臨時買上録』(明治十四年、宮内庁書陵部蔵)に所載の同内国博からの買い上げ目録に「大幅壁塩瀬友禪染掛物地」(出品者は西村總左衛門)とあることから、同内国博出品作と考えられる。近代化のなかで洋風の室内を装飾し、そして輸出品としても隆盛した美術染織の、その初期の姿を伝える貴重な作品である。

西村總左衛門(一八五五―一九三五)は、弘治元年(一五五五)に法衣商千切屋として創業し、江戸時代中頃より友禪を商うようになった老舗現在の株式会社千總の当主で、十二代目にあたる。明治十一年頃より友禪染の技術改良に取り組み、輸入された合成染料を用いて、天鷲絨友禪、鴨川染(合成染料を利用した色糊を用いて蒸して色を定着させる、いわゆる写友禪のこと)という新しい技法を開発し、その後の友禪染に大きな展開をもたらした。一方で西村は岸竹堂をはじめとする日本画家たちに染織の下絵を依頼して、意匠の刷新と展開を図った。これ以降、京都画壇を代表する画家たちが数多く染織下絵に関与しており、西陣を中心に新技術による大型の美術染織が内外の博覧会に出品されて高い評価を得るようになる。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

内国勸業博覧会 ― 明治美術の幕開け

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 57

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年四月二十一日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections